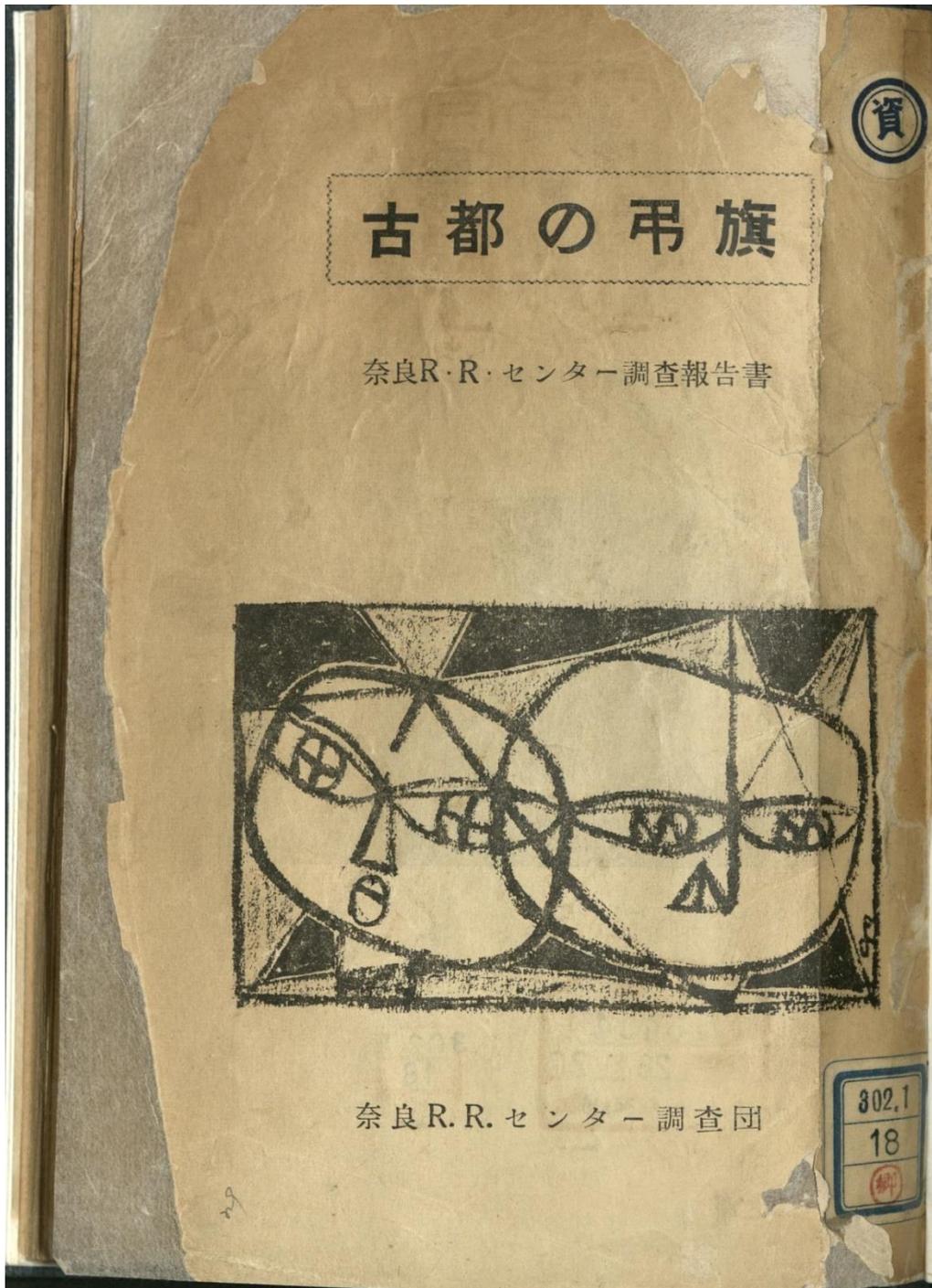


戦争体験文庫第 61 回資料展示

『古都の弔旗』を読む



令和4年11月12日～5年2月26日

解説

現在、平城宮跡歴史公園として整備された旧積水化学(株)工場跡地の一角に、朝鮮戦争末期の一時期、米軍のRR(レストアンドレクリエーション)センターが置かれていた。今回取り上げる主役『古都の弔旗』は、「“あの朝鮮戦争”から一週間の休暇を得て日本に帰ってくる米兵を“なぐさめる”所」と紹介している。センター自体は軍直営で、健全な娯楽を提供するものであったが、これを取り囲むように、バーやキャバレー等40-70軒、パンパン宿130軒が一举に集まった(吉田容子「米軍施設と周辺歓楽街をめぐる地域社会の対応」、書誌事項は文献リスト参照)という。

もっとも、こうした事態は必ずしもこの時期に始まったのではない。米軍の部隊から朝鮮戦争に入る以前と判断できる写真には、「闇の女の取締」を行っているので、日没後にこの付近で佇立または徘徊をするなどいう、奈良警察署の制札がみられる(本図録2頁)。この写真が撮られた場所は不明だが、接收された奈良ホテルが占領軍の娯楽場と使われていた(『奈良ホテル物語』)ため、この周辺だったと類推される。

しかし、在来の花街も存在した奈良ホテル周辺、奈良町と違い、平城宮跡やRRセンター周辺は、まだ奈良市街の郊外拡張は進んでおらず、「都城変じて田畝となる」と形容される通りの完全な農村地帯であった。加えて、日本占領を予期して一定の訓練を受けていた進駐軍奈良軍政府要員と、戦闘に投入された一般兵士では、兵士の質にも大きな差があったであろう。

『古都の弔旗』はしがきによれば、編集発行人の「奈良RRセンター調査団」は、奈良ユネスコ学生連盟奈良学芸大学(現奈良教育大学)学生会・奈良女子大学自治会・京都ユネスコ学生連盟・同志社大学学術団・大阪ユネスコ学生連盟の学生で組織されたという。3つのユネスコすなわち国際連合文化教育機構の協力組織が関わっているが、米軍は当時「国連軍」の名で朝鮮戦争を戦っていたことを思うと皮肉である。

1953(昭和28)年7月7-12日に現地調査が行われ、8月31日に発行された小冊子『古都の弔旗』の構成は次のとおりである。

もくろく／はしがき／個別訪問篇 一、農民問題 二、商人問題 三、パンパン、ポン引き、くつみがき、麻薬、アメリカ兵 四、村人の動き 五、結び／都跡小学校篇 一、生徒え(ママ)のアンケート 二、奈良市センター地区におけるアンケート 三、先生との座談会 四、まとめ 五、子供会 六、結び／あとがき

なお、当時奈良RRセンター廃止期成同盟の代表幹事で、後奈良ユネスコ会の第3代会長となる矢川敏雄は、「そのころRRセンター廃止運動が圧観でした。奈良ユネスコ運動の一頁にはどうしても削除できないでしょう」と回顧している(『ユネスコと歩いて三十年』)ので、ユネスコのRRセンター問題への取り組みは学生に限らなかった。

『古都の弔旗』あとがきでは、「平和日本の建設と、子供達の自由にのびゆく社会を創るためには、日本に占領軍の軍事基地を創らない政府とアメリカ軍の撤退がどうしても必要であろう」と、極めて政治的で、かつ現代にもつながる主張で本書を結んでいる。

奥付には、代表のひとりとして「浜田博生(奈良学芸大学内)」の名前が見えている。浜田は当時「村の歴史・工場の歴史」をうたった国民的歴史学運動にも、奈良の学生間では中心的活動家として携わっていた。

年	月日	事項
1950	6.15	朝鮮戦争勃発
1952	4.28	サンフランシスコ講和条約発効
	5.1	奈良RRセンター開設
	6.24	枚方・吹田事件起こる
		(この頃大須事件・白鳥事件等共産党による騒擾事件続く)
	9.3	奈良RRセンター廃止期成同盟会結成
1953	6.26	奈良RRセンター休止
	7.7-12	奈良RRセンター調査団による調査
	7.27	奈良RRセンター再開／朝鮮戦争休戦協定
	8.11	RRセンター神戸に移転を発表
	8.31	『古都の弔旗』発行

『古都の弔旗』表紙裏より

原本保護のため和紙をあてているので判読しづらいが、室内で米兵(右)が日本人少年(左)から靴磨きを受けているものとみられる。

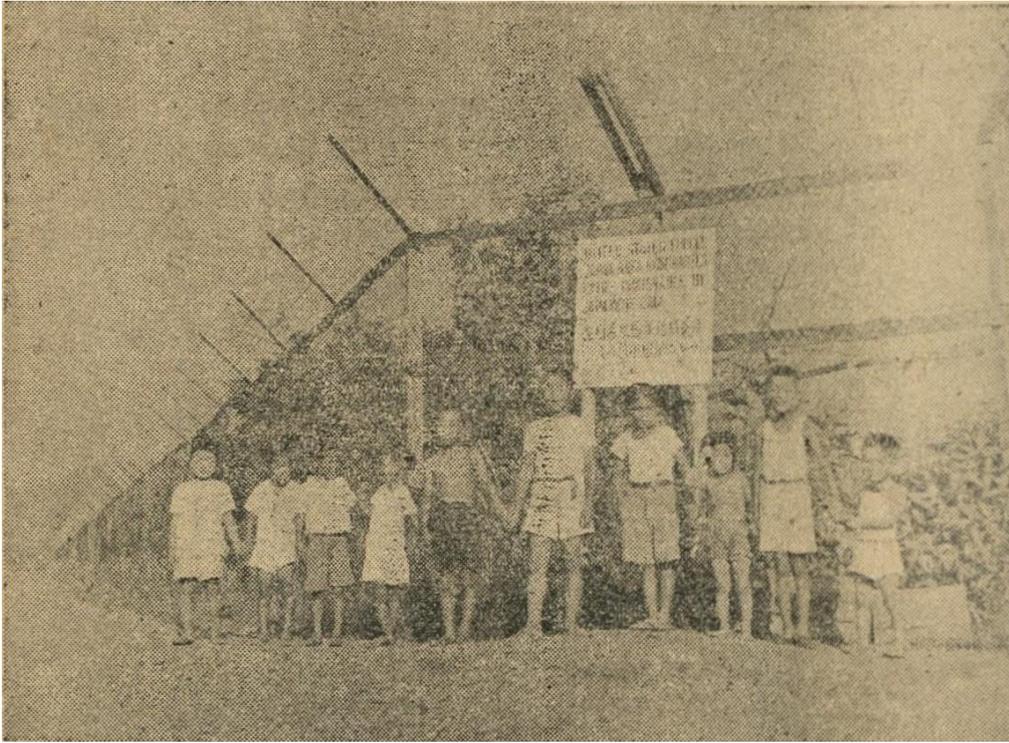
女性のポスターや「アサヒビール」の文字がかすかに判読できる。

本書は「くつみがき」について「(地元の)子供たちの恐怖の的」「西瓜など畑の作物を盗む」「未就学児」「万引きなどの狼藉を働き」「性的遊戯の蔓延者」と非常に厳しい形容をしている。



『古都の弔旗』個別訪問篇中表紙より。5、6軒写っている建物が、「木造に原色豊かなる仮建築」とされている急造されたバーやキャバレーであろうか。個別訪問篇では、周辺地域農民の生活状況や水利慣行を踏まえたうえで、400人近いパンパンの出身地や米兵の行状を調査している。続いて村民のセンターに対する賛否両論の意見を紹介したうえで、「教育上、風紀上は反対」「経済上はよい」ことに集約さ

れるとする。さらにセンターがあるのは、日本が戦争に負けたからだという意見が大半で、「村には行政協定とか安全保障条約の本質は全然理解されておらず、村には R・R センターが朝鮮戦争とか、再軍備の問題とつながっている」認識に欠ける、と批判する。そのうえで結びとして、アメリカと吉田政権を批判したうえで、「労働者の指導によって農民の統一要求を組織し」「屈辱単独講和の破棄、安保条約、行政協定などの不平等なる結び付を断ち切り、自由で平和な、私達の利益を守る政府」が必要とする。



『古都の弔旗』都跡小学校篇中表紙より。後に見えるフェンスは、RRセンターのものであろう。横文字らしきの看板が見えるが判読できない。都跡小学校篇「生徒えのアンケート」は、5年雪組生徒を対象とした質問票アンケートと、3年月組を対象とした調査員が入ってのグループアンケートからなる。雪組質問票には、「アメリカ兵は好きですか」という接問があり、好き 1、わからない 18、きらい 22、無記名[無記入のことか]2 という結果になっている。「パンパンをどう思いますか」だと、好き 0、わからない 11、きらい 30、無記名 3 となっている。月組アンケートだと、両者を「きらい」とする割合がさらに高まるが、これには調査者の誘導もあるように思える。

[進駐軍アルバム]より。

「警告 目下風教刷新のために闇の女の取締りを励行しております。そこで日没後この付近で佇立又は徘徊する婦女子は闇の女と認められ迷惑のかかる場合がありますから、善良な婦女子は誤解を招かないよう御注意願ひます

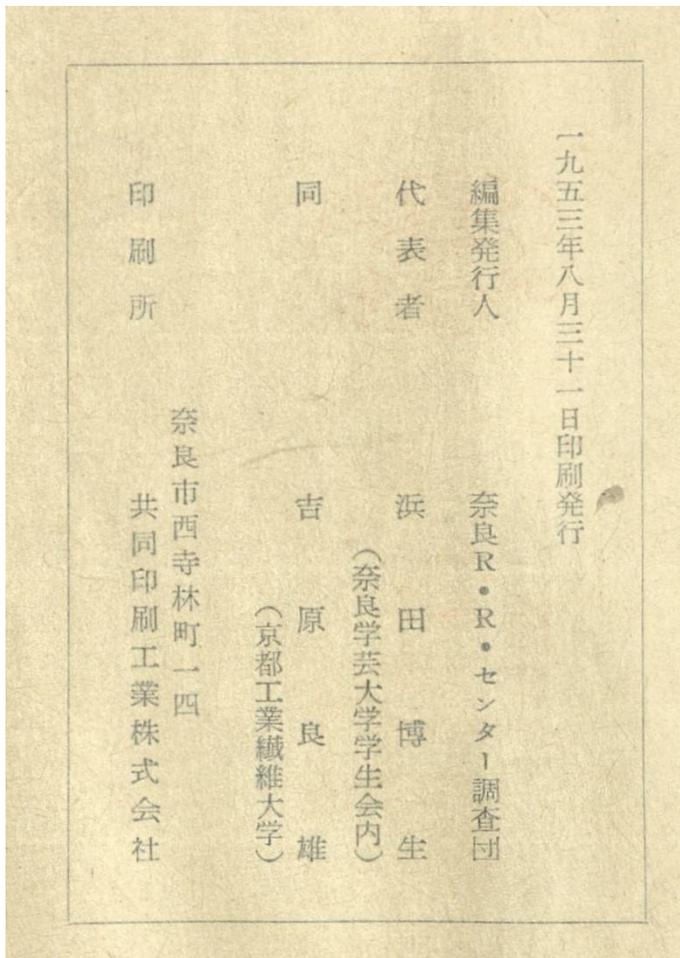
奈良警察署」

とある。

つまり、闇の女=売春婦の取締りをしているので、夜間にこの周辺を歩く女性は、売春婦と見なすという警察の警告である。

では、「パンパン」は取締りの対象にならないのかという、微妙なところで、『奈良県警察史』昭和編によれば、1946年GHQの指示に従い、内務省は「娼妓取締規則」を廃止、公娼制は廃止された。しかし、旧娼妓の自由意志による売春は可能で、RRセンター周辺に対しても、キャバレーの家宅捜索やポン引きの検挙等の取締りを行ったと同書はしている。



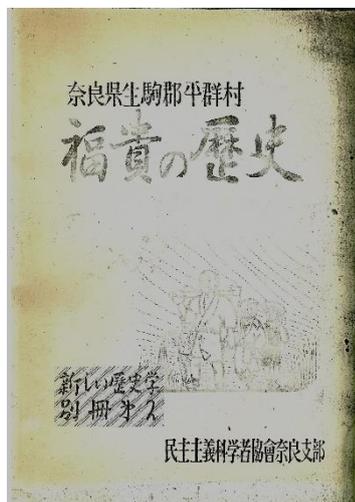
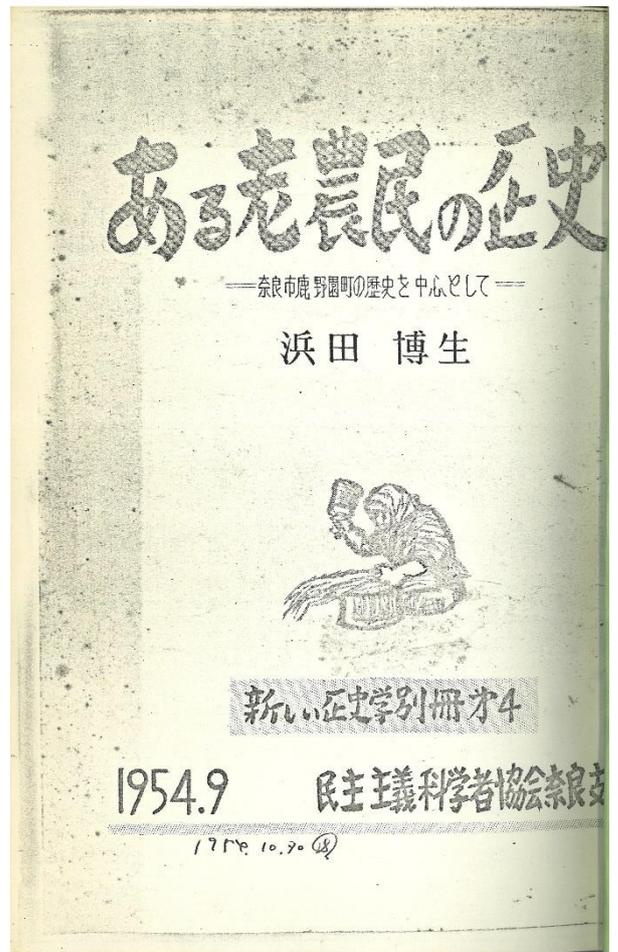


『古都の弔旗』奥付。ここにある浜田が、国民的歴史学運動に携わっていたことは前述したが、この運動は、石母田正らが、支配者の歴史ではなく「村の歴史、工場の歴史」（『歴史と民族の発見』）を調べるべきと主唱し始められた。

武装革命戦術を取っていた共産党の引き回しといったマイナスイメージで語られることの多かった運動だが、近年再評価が始まっている。高田雅士『戦後日本の文化運動と歴史叙述』は、奈良や京都府南部での事例を中心に、史料を発掘して検討を加え、特に教員となった層に、運動の志は引き継がれたと、指摘している。高田は、都立大から東京都の中学教員になった加藤文三の「私は今でも国民的歴史学の精神で生きている」という1973年段階での回顧を引いているが(p140)、浜田にも『歴史評論』に掲載された「国民的歴史学運動の私とその後」に「国民的歴史学の運動で身につけたものの凡てがわたくしの教育実践にいかされた」という全く同趣旨の発言がある。

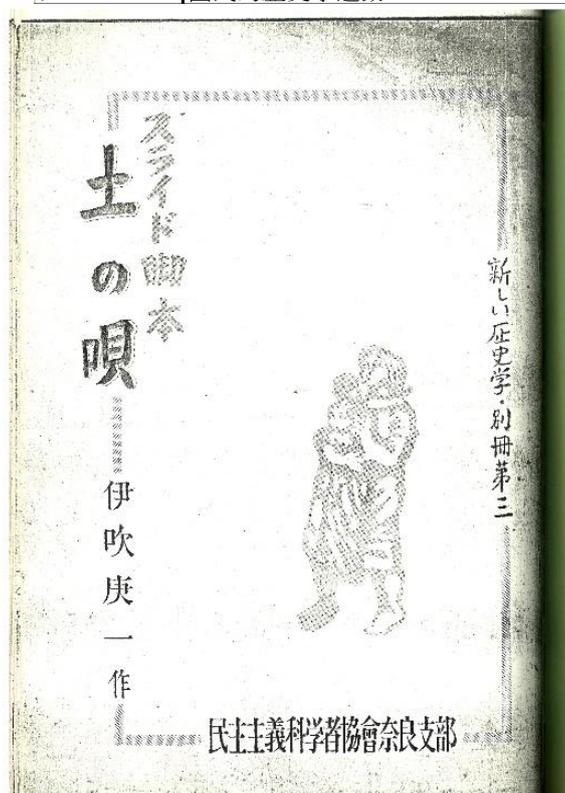
運動を担った民主主義科学者協会（民科）は、地域別・学問分野別にも組織され、奈良支部は歴史部会を中心に『新しい歴史学』を発行しているが、当館は、1,4,6,10,13号の複製を所蔵するのみである。高田によれば、大原社研が5号、エル大阪が14号を所蔵する他、運動に関わった故奥田修三宅に12号が残り、高田自身も3号を古書店から入手したという。

『新しい歴史学』には別冊もあり、浜田の名で右の『ある老農民の歴史』、伊吹庚一の名で龍門騒動を扱った『スライド脚本土の唄』、無記名で下の『奈良県生駒郡平群村福貴の歴史』を発表している他、別冊と銘打たない「龍門一揆の調査」がある（この4点の複製は当館所蔵）。現存する奈良歴史研究会は、性格こそ異なってきたが、民科奈良支部歴史部会の後身にあたる。



文献リスト					
請求記号等	書名等	著者名	出版者	出版年	所在
1.『古都の弔旗』他					
302.1-18	古都の弔旗：奈良R・R・センター調査報告書	奈良R・R・センター調査団編	奈良R・R・センター調査団	1953.8	書庫1
302.1-コト ノチ-4719	古都の弔旗：奈良R・R・センター調査報告書 複製版	奈良R・R・センター調査団編	奈良R・R・センター調査団	1953.8	戦争体験 文庫
317.7-25-2	奈良県警察史 昭和編	奈良県警察史編集委員会編	奈良県警察本部	1978	ふるさと
(論考)	米軍施設と周辺歓楽街をめぐる地域社会の対応	吉田容子著	地理科学学会(広島大学)『地理科学』65-4	2010	書庫1
2.関係者の著作					
(論考)	ある老農民の歴史：奈良市鹿野園町の歴史を中心として：新しい歴史学別冊4	浜田博生著	民主主義科学者協会奈良支部	1954.9	書庫1(予定)
(論考)	国民的歴史学運動の私とその後	浜田博生著	歴史評論267	1972.9	書庫1
319.9-43	ユネスコと歩いて三十年	奈良ユネスコ協会 [編]	奈良ユネスコ協会	1977.7	書庫1
371.7-150	新しい小学校の同和教育	浜田博生著	部落問題研究所 出版部	1986.6	ふるさと
329.34-ナラ ユ-1996	奈良ユネスコ協会創立50周年誌		奈良ユネスコ協会	1996.6	ふるさと
709.165-イン へ-2000	奈良世界遺産と住民運動	石部正志, 杉田義, 浜田博生著	新日本出版社	2000.6	ふるさと
289.1-オクニ -2007	坂道をこえて：歴史の革新に生きた教師	奥西一夫先生を偲ぶ 会編	奥西一夫先生を 偲ぶ会	2007.9	ふるさと
3.米軍関係					
317.853- 4719	Nara military government team [複製版]		[Nara military government]	1948	戦争体験 文庫
369.4-24	基地の子：この事実をどう考えたらよいか	清水幾太郎, 宮原誠 一, 上田庄三郎共編	光文社	1953	書庫1
740-4719	[進駐軍アルバム]		私製	19--	戦争体験 文庫
689-6	奈良ホテル物語：その75年の歩み	奈良ホテル編	奈良ホテル	1984.7	ふるさと
080-チクマ	進駐軍向け特殊慰安所RAA (ちくま新書:1641)	村上勝彦著	筑摩書房	2022.3	一般資料
4.朝鮮戦争と国内の世相					
326.22-ニシム	大阪で闘った朝鮮戦争：吹田枚方事件の青春群像 第2刷	西村秀樹著	岩波書店	2004.1 2	書庫1
309.31-ワキタ	朝鮮戦争と吹田・枚方事件：戦後史の空白を埋める	脇田憲一著	明石書店	2004.3	書庫1
221.07-キムチ	在日義勇兵帰還せず：朝鮮戦争秘史	金贊汀著	岩波書店	2007.1	書庫1
315.1-コヤマ	戦後日本共産党史：党内闘争の歴史 (こぶし文庫:50. 戦後日本思想の原点)	小山弘健著/津田道夫編・解説	こぶし書房	2008.5	一般資料
326.22-ミヤシ	検証大須事件の全貌：日本共産党史の偽造・検察の謀略・裁判経過	宮地健一著	御茶の水書房	2009.5	一般資料

請求記号等	書名等	著者名	出版者	出版年	所在
315.1-シハフ-2012	道遥かなり奥吉野：共産党老党员の回想録：「山村工作隊」と「五〇年問題」を乗り越え林業と山村の再生を探る	芝房治著	奈良新聞社	2012.11	ふるさと
326.23-ワタヘ	白鳥事件偽りの冤罪	渡部富哉著	同時代社	2012.12	一般資料
326.22-ニシム	朝鮮戦争に「参戦」した日本	西村秀樹著	三一書房	2019.6	一般資料
5.国民的歴史学運動					
363.1-15	正しい民主主義：教科書「民主主義」(上)の批判	民主主義科学者協会 奈良支部著	文化社	1949.8	書庫1
雑誌	新しい歴史学 複製版 1,4,6,8,10,13,別冊2,別冊3,		民主主義科学者協会奈良支部	1957-1954	ふるさと
201-8	歴史と民族の発見 [正]	石母田正著	東京大学出版会	1952	書庫1
201-9	歴史と民族の発見 続	石母田正著	東京大学出版会	1953	書庫1
210.04-186	戦後歴史学の思想	石母田正著	法政大学出版局	1977.3	書庫1
210.08-389-14	歴史と民族の発見 (石母田正著作集:第14巻)	石母田正著	岩波書店	1989.10	一般資料
210.08-292-33	民科歴史部会資料集 (歴史科学大系:第33巻)	渡辺菊雄, 梅田欽治 編集・解説	校倉書房	1999.3	書庫1
210.76-オクマ	「民主」と「愛国」：戦後日本のナショナリズムと公共性	小熊英二著	新曜社	2002.10	書庫1
204-トウマ	希望の歴史学：藤間生大著作論集	藤間生大著/磯前順一, 山本昭宏編	ペリかん社	2018.8	一般資料
201.2-レキシ	歴史科学の思想と運動	歴史科学協議会編	大月書店	2019.12	一般資料
210.01-タカタ-2022	戦後日本の文化運動と歴史叙述：地域のなかの国民的歴史学運動	高田雅士著	小さ子社	2022.1	ふるさと



2022.11
奈良県立図書館編、発行